

ウナル

挿絵：春明

多岐ませで王子様

異世界で王子になった俺は
巨乳なお嬢様たちと子作りハーレムライフ！



試し読み版

第一章

王子、始めます

007

第二章

魔法使いなお嬢様、トルテージュ

055

第三章

女騎士なお嬢様、エクレール

097

第四章

両手に花

138

第五章

敏腕宰相ベルリーナの憂鬱

181

第六章

子作りハーレムライフ！

221

続いただろう。気がつくくと翔太は見知らぬ部屋に立っていた。

「こ、ここは……どこ？」

瞳に飛び込んできた金銀の光に、翔太は口から呆然と言葉を落とした。

まず広さからしておかしい。マンションをワンフロアぶち抜かねばこんな広さは得られないだろう。天井はバスケットボールもできそうなほど高く、恐ろしいことにその天板一つ一つに細かな彫刻が彫り込まれていた。

足裏に感じる絨毯は、まるで雲の上を歩いているように柔らかなだ。窓は日々磨かれていくのか曇り一つない。壁には目も眩むような美しい装飾品が並び、部屋全体に高貴さを感じさせる香りが満ちていた。

そしてその部屋の中央に鎮座した巨大なベッドを認識したところで、翔太はようやくここが『ただの寝室』であることを理解した。

「——何をしているのかしら？」

部屋に見惚れていた翔太は、突然の背後の声に悲鳴を上げて床に転がった。

そこで再び翔太は言葉を失う。背後に立っていた女性の、あまりの美しさを表す言葉を持たなかったのだ。

上着を着込んででも隠しきれない豊満な膨らみ。それに相反するようにその立ち姿は凛々しい。濃い紺色の上着に白いシャツに身を包み、ピンと背筋を伸ばしている。服装こそ古

めかしいが、その出で立ちは大企業のキャリアウーマンといった風采だ。

「ごくっ！」

あれほど輝いて見えた芸術品が、一瞬にしてガラクタに見えてしまうほどの美しさ。その姿に翔太は息を飲む。

「す、すみませんでした！」

冷静さを取り戻した翔太は一も二もなく頭を垂れた。何を謝っているのか自分でもわからないが、とにかく相手の気を立たせないよう謝罪を口にする。

「そ、その！ 家に帰ったと思っただらここにいて！ お、俺もよくわからないんだけど、とにかくごめんさい！」

額にすり傷を作るつもりで頭を擦り付けたのだが、逆にふわふわの絨毯に顔を受け止められてしまった。ともあれ翔太はひたすらに謝り続け、女性の次の言葉を待つ。

「……あの？」

いつまで経っても続きの言葉が聞けず、翔太はわずかに顔を上げた。

革のブーツから伸びる足が覗き、その均整の取れた太ももに呼吸が荒くなってしまった。

「わっ!？」

突如として伸びた手があごを取った。指先の柔らかさと体温に心音が大きく波打つ。

「静かに！ 顔を見せてください！」

気が付けば目の前に女性の顔があつた。消しゴム一つ分もないくらいのも、密着みっちゃんくと言つてよいほどの距離。

（ま、まつ毛長！ 肌もクリームみたいせんさいに繊細せんさいで！ そ、それに息が顔にかかつてる！）鼻先なせに感じる吐息。適度しゆめな湿度けを帯びたそれは、顔を舐なめられてゐるかのような心地良さだつた。おまけに花のような甘い匂においが漂い、翔太はあらゆる思考を溶かされる。

（お、女の人つてこんな面白い匂においがするのか!? そ、それに！）目を下げればそこに二つの膨らみがある。これでは自分の足元すら見えないのではないかと思ふ大迫力。その様に男としての本能かまくびが鎌首かまくびを上げてしまう。

「お……王子」

女性の声に翔太は我に返る。目の前の女性は砂漠で花を見たような、惚ぼろけとも安堵あんどとも取れる表情でいた。

「王子様！」

「ええ！ ええええっ！」

年上の女性に抱きつかれるなど初めての体験だつた。胸元むなもとに圧倒的柔らかさが広がる。香りはますます濃くなり、彼女の体温にドクドクと脈が高まつていった。

「そ、その！ 落ち着いて！ は、話を聞いてください！」

なんとか彼女の身体を引き離しつつ、翔太は現状を確認するため質問を重ねた。

「……つまりここはケーゼっていう王国で、俺はその王子様にそっくりだったと？」

彼女から聞いた話を要約すると、そういうことらしい。

『家の扉を開けたらそこは異世界だった』。にわかには信じられない話だが、窓の外に広がる城と石作りの民家はとても作り物とは思えない。遠くから聞こえてくる人々の喧騒や空を飛ぶ四足の鳥などは、夢を見ているというにはあまりにリアリティがあり過ぎる。

「その通りです。賀藤様。先程は失礼いたしました。私はベルリーナ・アベントプロート。この国の宰相を務めております」

「翔太でいいよ。ベルリーナさん」

「ベルリーナで構いませんよ。翔太様」

親しい笑みを浮かべるベルリーナ。その表情に翔太も強張っていた表情を緩ませる。

「それにしても信じるんですか？ 俺が異世界から来たなんて」

「もちろんです。その服装や格好は明らかに異質なものですし、どこかの国の間者だとしてたら王子の寝室まで侵入しておいて棒立ちなんて間抜けなことはしないでしようから」

豪胆なその物言いに翔太は思わず感心すらししてしまった。その是非はともかく、一国の宰相となると度量からして違うらしい。

「それで翔太様。翔太様はこれからどうなされるおつもりですか？」

「どうもこうも一体どうすればいいのか。帰る方法もわからないし」

その返答にふむと一つ頷き、ベルリーナは真剣な視線で翔太を見た。

「……では、翔太様。この国の王子になつていただけませんか？」

「——へ？」

その言葉に翔太はあごを落とした。

「いやいやいや！ この国はちゃんと王子がいるんですよ！」

「王子は一年前に事故で亡くなつております。そして王子がこの国で唯一王族の血脈を受け継ぐ者でありました。現状、王位を継ぐ者がこの国にはおられないのです」

きつぱりと、しかし強い口調でベルリーナは言った。

「な、なら新しい王様を選ぶとかじゃダメなの？ 選挙とかして」

「それも難しいのです。何せ万人を納得させることのできる理由がありませんから。最悪の場合、権力を持つ貴族たちによる内戦になりかねません。そしてその動乱を敵国が見逃すはずがない。特に隣国のヴィアンテ帝国は、未だ我が国への侵略の意志を持ち続けます。隙を見せればすぐさまに攻め入ってくるでしょう」

「な、なるほど。政治的事情というやつですか」

「そういうことですね。そのため王子は病に伏せているとして、私が一切の実務を処理しています。とはいえ、その建前も流石に限界にきていました。そんな時に王子そっくりの翔太様が現れた。これは神の思し召しに違いありません」

「は、はは。そ、そう……かな？」

——自分はとてつもないことに巻き込まれつつあるのではないか。

そんな予感に身を焼く翔太の手をベルリーナの手が優しく包む。しかしそのぬくもりが、今の翔太には死神の手のように感じられた。

「ねえ翔太様。翔太様はこの世界に身寄りがないご様子。もし協力していただけるならその生活を全面的に保障いたしますよ？ 王子として接して全力でもてなしをいたします」

「で……でも……」

「もちろん無理にとは言いません。しかし季節は春とはいえ夜はまだ冷えます。雨など降ればさぞ冷たいでしょうね。それに貧民街などに迷い込んでしまえば物取りにあう可能性もないとは言いません。身ぐるみ剥がされるだけなら御の字。万が一の場合は——」

「わ、わかった！ わかったよ！ できるだけのことは協力するから！」
「そうですか！ それはよかったです！」

おどろおどろしい表情が一転して晴れ渡るようにベルリーナは笑った。身体から一切のプレッシャーが消え、翔太は肺の中の空気を全て吐ききった。

「で、でも！ 俺、王子の仕事なんか何も知らないからね！」

「大丈夫です。実務の方は私が全て行いますので問題ありません。何かしら対応が必要な場合は逐一お教えいたします。それに翔太様にしていただきたいことはたった一つです」

「一つ？ それって一体」

「子作りです」

「……………え？」

突然の言葉に全ての思考が停止する。こんな美人がまさかそんな言葉を臆面もなく言い放つなんて完全に予想外だった。

「こ、こ、子作り？ そ、それってセ、セツ……………!？」

「はい。子作り。セックスです。翔太様にはご子女様たちを孕ませていただきます。その子たちをケーゼ王国の正統な後継者として育てれば全ての問題は解決します」

「そ、それはそうかもしれないけれど！ だからってそんないきなり！」

「？ もしや元の世界に操みさおを立てている方がいらっしやるのですか？」

「うぐ！」

純粋な疑問の視線が胸に突き刺さる。彼女居ない歴Ⅱ年齢の身としてはその瞳はあまりにも心苦しい。

「い、いないけど……………結婚は愛し合う者同士でやるべきで、騙だましてするようなことは……………」

「——ああ、そういうことですか」

全て理解したとばかりに頷くベルリーナに翔太は胸を撫なで下おろす。

「翔太様は童貞どうていでいらっしやるのですね」

「うおるあああああああああああああああつっ！」
あつさりずぼしと凶星を突かれ、打ち上げられた魚のごとく翔太は跳ねる。

「ふふっ、翔太様は可愛らしいですね」

「い、言わないで！ そんな目で見ないでえ！」

「なるほど。そういうことでしたら話が早くて助かりますよ」

ベルリーナの瞳が弓形に曲げられる。先程までとはまた違う、含みのある視線に曝されドキリとした。

「翔太様……せつかくですので予行練習と参りませんか？」

「そ、それってどういう……わっ!!」

しゅるり。布ずれの音と共に、ベルリーナの上着がはらりと落ちた。さらに止める暇すらなく、白いシャツのボタンが外されていく。

「べ、ベルリーナっ!!」

シャツから肩が抜かれ、その豊満な乳房が露わになった。大ぶりのメロンと表現したがとんでもない。服に覆い隠されていたのは大玉のスイカのような素晴らしい双丘だ。

流石に右手で最も大切な所は隠しているものの、それでも乳房の上下はまるで隠しきれず、逆に一部を隠すことで余計に背德的に映ってしまう。

「あら。もうこんなに応えていますね……可愛い♪」

「っ！」

股間こかんを押し上げるイチモツを翔太は慌てて手で覆う。しかし時すでに遅し、ペルリーナの視線はねつとりと男性器だんせいきの形をなぞった後であった。

「女性の胸がお好きなのですね」

「そ、それは……」

「正直になっていいのですよ。決して恥ずかしいことではないのですから。殿方とのがたとして立派な機能を持つているという証拠です。だからもつと自信を持つて見せてください。翔太様のお・ち・ん・ち・ん♪」

言葉が魔法のように脳裏のうりに沁み込んでくる。

これほど奇麗きれいな女性の口から紡がれる卑猥ひわいな言葉。さらにその女性は男の醜態しゅうたいを見てもそれを誇れと言う。それがお愛想あいそうだとわかっている、甘い響きに逆らえない。

「貴族の令嬢れいじょうの方々は私などより優美で魅力的です。そんな方々を貴方は花嫁として迎えることができますのです。可愛い女の子がよりどりみどり。『お嫁さんになりたい』って待ちかねています。そんな方々を……貴方は自由にできるんですよ？」

「そ、それは……っ！」

ごくっ！

自然と生唾なまつばが口内に噴き出していた。この世界のまだ見ぬ美女たち。本来なら出会うこ

とすらなかつた子たちが求婚を願つて近づいて来てくれる。男としてこれほどロマンあることがあるだろうか。

「さあ、触つてみてください。女性の膨らみを」

差し出すようにベルリーナは豊丘ほうきゅうを寄せて見せた。まさしく蜜に誘われる蝶のように、

翔太はその柔肌やわはだに手を伸ばした。

ふにつ。

「あんっ♪ 翔太様あ♪」

指がどこまでも沈み込んでいく。それどころか形を変えて指先を包み込んでくれるようだった。肌はどこにもひっかかる部分がなく、餅のような滑らかさであった。

（こ、これが女の人のおっぱい！ や、柔らか過ぎて形が変わっていく！ どくんどくんつて脈打つてる！ す、すごい！ こ、こんなに素敵なものがこの世にあったなんて！）

もつと触りたい。もつと愛したい。理性の糸がキリキリと音を立てる。代わりに起き上がる生殖本能が目の前の『女性』を求めている。

「さあ翔太様、好きになさつていいのですよ♪」

ベルリーナの手が股間を擦る。ズボン越しにでも感じる丁寧べんしんな奉仕ほうしに翔太の鼓動が早くなつていく。

「べ、ベルリーナさん……お、俺！」



びめるっ！

股間に広がる温かさ。まったくの無意識のうちに放たれてしまった精に翔太は目を白黒させて股間を押さえた。

「うあっ!? ま、待って……っ！」

必死に尿道を締めようとするも射精は止まらず、ベルリーナの前で翔太は前のめりに倒れてしまった。

「あらあら」

さしものベルリーナも苦笑している。その顔にある愛いとしさとわずかな困惑こんわくがただただ恥ずかしい。乳房に触れただけで果ててしまった。これから子作り生活を送ろうという王子様の、何とも情けない初射精であった。

それから一時間後、ベルリーナに替えの服を用意して貰った翔太は城内を案内して貰うことにした。

「気を落とさないでください。子作りにおいてお盛んなのはよいことですよ？」
「だからって……はあああっ」

蕩ける熱さが肉棒の先を包む。身体のごく一部を包まれただけなのに、身体全体がビクンと跳ね上がってしまった。ぬちぬちと音を立てて肉の壁を雄槍が進む。まるで底などないと思えるほどの深い、深い肉の穴に身体全部が飲み込まれてしまうようだった。

——大丈夫なのだろうか。

快感にのたうちながらも相手の体内を穿った感触に、思わず心配してしまふ。

だがベルリーナの顔は緩んだ笑み浮かべ、その膺もぎゅうとペニスを抱きしめてくれた。その表情が愛おしいと同時に、心の底から安心できた。

「童貞卒業、おめでとうございます♪」

頬を撫でられながらそう囁かれた。ぞくりとした男の感動が全身を駆け巡る。

「ああ、感じます。王子のものが身体の中に……逞しいものが私の身体の中でとくんとくんと脈打って……私の身体で王子を男にさせていただけなんです……っ！」

うっとりとしてベルリーナは腹部を撫で、そこにある翔太のイチモツを感じ取る。

腰を振るう動きは段々と大胆になり、いつしかぬちぬちと淫猥な水音を立て始める。

翔太の方も肉棒全体にじわじわと塗りたくられる愛蜜の熱さをはっきりと感じていた。

「んふう……王子様、もう腰が止められません♪ 動きますね♪ 動いちゃいますね♪

あつ！ ああんっ！」

「うぐっ！ ペ、ペニス全部抜かれて！ 溶けるくらい熱いよ！ こ、これ気持ち良い



っ！」

「ずちゅっ！ぬちゅっ！ぐちゅっ！」

翔太の胸に手を置きながらベルリーナは腰を上下させ始めた。接合部から漏れ出る音で耳まで感じてしまう。振り乱されるベルリーナの髪。乳房がぶるんぶると震え、円を描くように目の前で踊る。

（す、すご過ぎる！ チンポ扱かれて、おっぱいも目の前でこんなに震えて！ あ、ああ！
ぶつかるお尻も気持ちいいいいっ！）

がくがくと腰が震える。本物のセックスによって、翔太はもうダメになっていた。

今まで自分の手で行っていたのがなんだったのかと思えるほどの全身快感。先程出したばかりだというのに、欲望の汁は出せ出せと出口を叩き、こうがん睾丸が痛いほどにきゅつと釣り上がる。

「ふふっ。先程からここに釘付けですよ♪」

そう言ってベルリーナは自らの腕で乳房を寄せて見せた。ただでさえポリユームな胸元が腕に持ち上げられて目の前に近づけられる。深い谷間に消えていく汗と見てわかるほど硬く凝り立った乳首。まさに乳房の山脈だ。それを目の前にしては翔太の理性はあっさり屈した。

「べ、ベルリーナ！こ、こんなワガママおっぱい見せつけて！」

「ああんっ♪ 激しいです♪ そんなにがつつかなくてもいくらでもお揉みください♪」
乳首を人指し指と中指の間に挟み、思いつき巨乳を揉みしだく。さっきまでとまた違う、上からのしかかる乳房を押し返す感触。より深く指は沈み、ベルリーナの身体ごと全部を手の中で感じてしまう。

何よりも胸と秘所の両方を味わっているという状況が、男としての欲望を満たしていく。
「えいっ！ ここも感じるんだよね！」

「あっ！ そこは……っ！ あんんっ！ んふうっ！」

指でピンクの宝石を挟み込み、ぎゅっぎゅっつと刺激する。流石に敏感な乳首を刺激されては余裕を保てないのか、ベルリーナの口からも快感の声上がる。

「そ、それにこっちも！ ベルリーナだけにさせては……いられないよ！」

「んっ、いいのですよ？ 私にお任せください……」

「いや、それは譲れないよ！ 俺だってベルリーナを気持ちよくさせる！」

「ずじゅっ！ じゅぶっ！ ずちゅっ！」

腹筋背筋を総動員してベルリーナの身体に肉槍を押し上げた。大きな胸ながら引き締まったウエストをしているためか、その重みは予想より遥かに軽い。それでも初めて体験する女性を腰だけで突き上げるという行為に翔太の全身から汗が噴き出した。
だが、それをするだけの価値はあった。

翔太の肉棒にははつきりとした処女の血を感じ取れていた。その熱さをしつかりと記憶しながら翔太は強くトルテと抱き合う。

激しい動きは必要なかった。繋がり、お互いを感じ合う。ただそれだけで、これ以上ないほどの満足感を得ることができた。

「……熱くて狭くて、まるで全部で抱きしめられているみたいだ」

「私も、ですわ♪ 翔太様と身体全部が繋がったよう……っ♪」

狭い腔内。しかし決して強張こわばった嫌な感触ではなく、柔らかさを兼ね備えた揺り籠かごだ。抱き合っている間に緊張もだいぶ解れたのか、腔内はびたりと張り付くように翔太のモノを抱きしめてくれている。

「……動くよ。トルテ」

小さな裸体を全身で抱き、翔太は腰をゆつくりと引き上げる。それにトルテのおマ○コが引きずられ、名残惜しむように吸い付いてきた。

「あ……あんなっ」

ぞくぞくとトルテは背筋を震わせる。女性は抜く時が一番感じるとベリリーナも言っていたがやはり本当らしい。カリ首で腔内を擦ることを意識して、翔太は肉棒を抜けてしま

うギリギリまで引き抜いた。

ぐっちゅうううっ！



「はぐうううううううっ!」

再び腰を落とし、肉棒の先をトルテの中へと沈み込ませる。睾丸がばちんとトルテの尻を叩き、不思議な快感が脊髄を登っていく。

「うくっ! トルテの中、すごい! キツキツで、なのに柔らかで!」

トルテの全てを感じたい。その一心で翔太は腰を振り続ける。

荒ぶる呼吸はトルテの香りも運んでくれた。薔薇のエッセンスに混じった汗と愛液の芳香。それを胸いっぱい吸い込みながら、肉棒を奥深くまで突き入れた。

「はぐっ!! んふうううう!」

亀頭の先がシコリのようなものに触れた。子宮。胎児を孕み、育てる場所。トルテの最も大切な場所だ。そこに翔太は届いたのだ。

「っ……トルテ」

トルテは息も絶え絶えになりながらも、笑んでくれる。

「ください……その中に、子種を……翔太様の子を!」

ちゅっ! ちゅうっ!

まるでキスをするかのように子宮口が鈴口を食む。出して出してというトルテの願いを、子宮も語ってくれているようだった。

「トルテ! トルテトルテ!」

「ああっ！ はっ！ はああああんっ！ 翔太様ああああああっ！」

ずじゅっ！ ずぶっ！ ぐぶっ！ ずちゃっ！

もはや冷静な受け答えをする余裕すらなく翔太は思い切り腰を突き入れる。トルテに全身で覆い被さり、深くを突ける位置へと体位を調整した。

「熱いっ！ 熱いですわあ！ ぜ、全身が翔太様に包まれて！ 心も身体も蕩とろけてしまいますううっ！」

ぶしゅぶしゅつとかき出されるトルテの愛蜜。それをイチモツ全体に塗りたくる。

子宮口を何度もノックするたびに膣肉全体がぎゅつと縮まり、肉棒が押し出されそうなほどの締め付けで快感を味わう。

「はひっ！ はああ！ 欲しい！ 欲しいです！ 翔太様あああああああ！」

限界まで肉棒が膨張し、全身の感覚が失われていく。それなのに、肉棒の感覚だけは鋭く研ぎ澄まされていく。トルテの膣の壁の一つ一つが感じ取れる。ありとあらゆる細胞が自分のために奉仕してくれているという感覚。

「出すよ！ トルテのおマ○コの中いっばいに！」

「はいいいいいっ！ 注いでくださいいっ！ 翔太様のものだという証をつ！ トルテのここに！」

背中を抱く腕の柔らかさ、腰を抱く足の感触、胸板では豊満な乳房がぶるんぶるんと揺

トルテからイチモツを抜き取り、エクレールへと移動する。トルテとはまた違う、引き締まった臀部の形。アナルもトルテよりやや大き目だが、深い皺を持っている。

「力を抜いてねエクレール……いくよ！」

ぐちっ！ ぬぐぐぐっ！

腰を挿んで位置を合わせ、菊門へと亀頭を押し付けた。くぱくぱと呼吸するように開閉するアナルがゆつくりと広がり亀頭を飲み込んでいく。

「あ、ああ……す、すごく熱くて硬い……これが翔太の肉棒……あぐうっ！」

針の穴ほどだったエクレールのアナルがコイン程にも広がった。めりめりと肛門を内側に巻き込みながら、肉棒がエクレールの内側へと入り込んでいく。身体を鍛えると括約筋も強くなるのか、トルテよりもさらに強烈な締め付けが肉棒を襲う。

「ふぐっ！ た、確かにこれはあ……変になつてしまっそうだ！ ああんっ！」

ぐぼっ！ ぶちゅっ！ ずちゅっ！ ぶちゅっ！

既にトルテの腸液で濡れていたイチモツはずるりとエクレールの中に入り込んだ。ギチギチと締め付けるアナルの味わい。それに負けじと翔太は尻穴を広げるように手で臀部を押しながら、上から潰すように腰を突き入れる。

「ああっ！ 全身に雷が落ちるう！ いひっ！ あ、頭がおかしくなるう！ はひっ!？」
ぬぼおっ！



一気にエクレールの中から肉棒を抜き取り、再びトルテへと向ける。

「ごめんよ！ エクレール！ またトルテに！」

「ああ翔太っ！ も、もつとして欲しいよお！」

「き、来ましたわ♪ さあトルテの穴をぐぼぐぼしてください♪ あああんっ♪」
ずっぷううううっ！

肉棒は再びトルテへ。ピストン運動で男根の先端から根元までを擦り上げ、トルテの喘ぎを奏で上げる。

「んくっ！ またエクレールに入れるよ！」

「ああ早く来てくれ♪ 逞しい翔太のモノで私のお尻を貫いてくれ♪ はうううっ♪」
ぐっぽおおおおっ！

トルテから引き抜き、またエクレールへ。

そしてまたエクレールからトルテへ。二人の穴を交互に味わう至高の贅沢ぜいたく。それを全身で味わいながら、翔太は二人の身体を貪り食う。

「くううっ！ も、もう出るよ！ 出る！ 二人ともお尻を近づけて！」

翔太の言葉に二人はお尻を形が変わるほどに密着させる。翔太は一人のアナルに抽送しつつ、もう片方へは指での愛撫を行う。

一瞬たりとも二人の尻快感を途切れないようにしながら、翔太は腰を振る。肉棒の快感

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

新登場
リアルノベルズ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルはわからない
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

女刑事美優

美優は自らの身体から...

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



あなたはどのタイプ?

新登場
リアルノベルズ
二次元ぷち文庫

あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!!

異世界で
手に入る
珠玉の
ライトノベル?

ドキドキクラブな
ハイレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫